

## 川が好き！山が好き！人が好き！＝四万十楽舎（四万十市西土佐）

清流通信読者の皆様こんにちは。今月は、四万十市西土佐“四万十楽舎”からお伝えします。



“四万十楽舎”事務局長 平野三智。とにかく元気！楽天的なポジティブ思考！この人の周りにはいつも笑いが絶えない！「貯金はな～んもないけど、なぜか将来に対する不安はないのよねえ。ダハハハ～！」高知県人の私が思い描く“土佐の女の典型”のような人で、おおらかで屈託がない。しかしお金にも縁がない。「でもそれがどうしたのサ！」という態度が堂に入っている。この人めっぽう酒にも強い。仕事を離れば、二人のお嬢さんを育てるアラフォーのシングルマザーでもある。

## ♪ 社団法人 西土佐環境・文化センター “四万十楽舎” ♪

四万十市西土佐、岩間沈下橋を過ぎて川沿いの道を下ること 1,9km、社団法人 西土佐環境・文化センター “四万十楽舎”の白い建物が、四万十川に架かる茅生大橋の向こうに見えてくる。

この四万十楽舎で事務局長を務める平野さんは、1998年7月の設立準備室開設のときから、“四万十楽舎の顔”である。1999年4月に誕生した四万十楽舎は、廃校となった旧中半小学校の建物を利用してつくられた自然体験宿泊施設で、カヌーツーリング・手作り筏での川下り・森林散策・星空観察…等々、四万十川とその周辺の自然がまるごと体験できるプログラムを有するユニークな施設だ。夏の“シーズン”には、四万十川を楽しもうと大勢の人たちが訪れる。

## ♪ 地元の“おんちゃん・おばちゃん”に認めてもらえるまでの長い道のり ♪

インタビューの途中で、電話が入る。「ゴウヤの芽がいっぱい出てきよるけん、植え直そうかと思ひよった。どう思う？」近所に住む野菜作りのお師匠さんからの電話にそう答える。今でこそ、そう答えられる関係になった。

“楽舎”が設立されたのは11年前。しかし、3年間ほどは赤字続きで、地元住民からも浮き上がっていたという。「設立当初は、お金を作ることに精一杯で、早く軌道に乗せなければという焦りもあったし、地元の人達に応援してもらいたいと思う心の余裕すらなかった。どこに行ってもなぜか謝ってばかりいた。」その話をしたときだけは、あの明るい“みっちゃん”が、一瞬遠くを見るように暗い表情をした。“四万十楽舎”とは何者なのか、どうしたら地元の人達にそれを知ってもらえるのか、その必要性を理解するのに時間がかかり、何者かを知ってもらうまでにも長い時を要した。

4年目に入ったとき、新しい風を組織に持ち込んでくれた人が着任する。山田高司副学長だ。世界中の川をカヌーで下る冒険家。彼が着任したときから流れが変わった。「地元の人との関係を重視すること、地域に入って積極的につながりを持つこと、その中から“楽舎”のあり方が見えてくる」そう教えられた。そしてスタッフ全員西土佐地域に移り住み“地域の人”となり、程なくして単年では赤字が出るようにもなった。そして、「人を大切にする、人とのつながりを大事にする、それがこれからもずっと四万十楽舎を続けていける基本的要素である。」そのことに、自分自身が納得した。こうして実に7年目にしよって、四万十楽舎は軌道にのった。



## ♪ 四万十楽舎のこれからと・・・ ♪

このごろは、夜“楽舎”に電気がついてないと「客入りが悪いのじゃないか」とか、「最近ご飯ちゃんと食べてる？」とか、近所の人達はまるで自分達の家族のように心配をしてくれる。時には、「ナスがいっぱい採れたから」と新鮮な野菜を届けてくれたりする。ここで生活していれば、山や川や畑の恵みで食生活は保証され、現金収入が無くてもあまり不安はないと笑う。

また、“楽舎”のプログラムには“地元の人達”指導によるアクティビティが多い。名人が作った手作り筏での川下り、昔ながらの竹の釣り竿での川漁…等々、川や山を知り尽くした人でないと出来得ない名人技の数々が、雄大な自然と共に訪れる人々を楽しませる。こうして四万十楽舎は、既に地域の中に深く入り込んで、その“中心”になりつつあるようだ。

「今はまだまだ勉強の時。地元の人から出来る限り多くのことを学びたい。山や川についての知識を吸収し、それを後世に伝えたいと思う。そして四万十楽舎が、地域の文化を発信する場所になればいいなと考える。」

今の仕事の魅力は？と聞いたとき、「川が好き、山が好き、ここに暮らす人が好き！だから、好きなこと全てを、自分の“仕事”として公然と出来ることが、とてもうれしい！」すぐさまその答えが返ってきた。

現状を嘆くのではなく、全ての物事にポジティブに取り組む彼女が、色々な物を事を、嬉々として創造していく姿を思い浮かべながら、少しだけ意外だった彼女のその答えに、「たぶんそう言うと思ったよ！」と、なぜか私はほっとしたのだった。